アーティストインタビュー
飯川晃さん

—演劇のお話を中心にしていきたいと思うんですが。飯川さんが生まれ育ってきて、演劇を始めるきっかけとかがあったと思うんですが、そういうお話を最初にしていただいて。そっからあと劇団時代、Lada Trosso に入って活動されていた時のお話とか、仙台周辺の演劇界隈との関わり方とかっていうところと。あとそのあとに、事業団に入って、事業団の職員として働き始めてからのお話というところにいきたいんですが。最初に、生まれてから、演劇を始めるきっかけみたいなところを。

飯川：はい。きっかけとしては、高校時代です。高校２年生の時に、たまたま前の席に座ったクラスメイトが、今、劇団四季で俳優をやっているやつなんですけど、彼がたまたま僕を振り返って、初対面なんですけど、「今、何時？」ってたまたま聞いてきたのがきっかけで。その時、僕はずっとやってたバスケを、膝と腰を痛めて、休んで辞めた時だったんですね。で、私が通っていたのは仙台三高って男子校、当時まだ男子校で、彼と仲良くなっていくうちに演劇部だと分かって。で、男子校の演劇部って何やってんだろうなと思って、全く知識ゼロだったんですけれど、なんか遊びに行ったら、もういきなり、じゃあエチュードやろうよみたいなことになって。で、コント的なことを何か遊びでやってたんですね。それが面白くなっちゃって。で、別に。三高当時は、どっかの部活に籍を置かなきゃいけないんで、じゃあ分かりましたと。何もしてない新聞部とかにいるよりは演劇部に籍を置いておこうかなということで。
　で、たまたまその年に、俳優というか、部員が多く集まって、顧問の先生がやる気を出したんですね。『十二人の怒れる男』という作品、あるじゃないですか。名作の法廷劇。あれを、秋にあるコンクールでやろうじゃないかということになりまして。僕は俳優じゃなくて、当時は舞台装置を作るような側のスタッフとして関わっていて。で、なんだかんだ言って、うまくコンクールは地区大会、県大会を勝ち抜いて、東北大会までいったんですね。それが三高の歴史上初めてだったということがあって。で、楽しくなったと。それが出会いというかって感じですね。

—２年生で入って、もう卒業するまで？

飯川：そうですね。そうですね。はい。で、卒業する段になって、大学に入るんですけれど。当時知り合いの紹介で、三角フラスコさんの野外公演が福島の信夫山でテント公演やるからっていう話を、僕が高校出るんでなんか続けたいなと思ったんですね。それで、紹介してもらって。で、信夫山のテント公演でフラスコの生田恵さん、森忠治さん、瀧原弘子さんと初めましてでお世話になったのが、仙台演劇界と言ったらいいのかな、と接触する直接の機

会でしたね。
—それで大学の卒業まで活動を続けるんですか？

飯川：はい。22 で、あ、そうですね。劇場経営の勉強してってさっき言ったんですけど、はたちの終わりの時にイギリスの、今はリーズという都市のリーズプレイハウスっていう劇場に 1 週間ゼミの研修旅行で行ったり。あとはその後、大学院に修士に進むんですけど、そこでオレゴン州、アメリカのオレゴン州にあるシェイクスピア・フェスティバルっていうところがあるんですね。オレゴン・シェイクスピア・フェスティバル。全英一の地域劇場って言われているところと、全米一の地域劇場って言われてるところに、うちのゼミの先生が衛紀生だったんですけど、当時。彼の企画したというか、研修旅行で、それぞれ 1 週間、海外の劇場を見ていく中で、これが、カルチャーショックですね、簡単に言うと、これが世界の地域劇場なんだということ肌で感じて。じゃあどういうふうに日本にこの、なんか熱い思いが、当時若い飯川青年が持ち帰って、どうしようかなっていう中で、自分が実際に関わって、プレイヤーとしての演劇っていう業界と、はたまた劇場経営っていうものを、進路を考えるにあたって、天秤にかけるわけなんですね。どう進もうかなと。
　で、その Lada Trosso の主催の安藤敏彦に、「僕はどうしたらいいですかね？　どっちを取ったらいいですかね？」って本当に悩んで、ばかみたいな質問したんですけど、「そりゃあ、劇場経営の勉強したんならそっちなんじゃないの。大学院まで進んだんだから」って。ですよねっていうことになって。ただ、僕はお芝居がずっと好きだったんで、もう論文も書かずにずっとただただ稽古ちゃん、稽古ちゃんって毎日行って、稽古行ってきますみたいな感じで、バイトと稽古ぐらいの毎日で。本当に勉強好きじゃなかったんですよね。全然勉強できなかったんですけど。なんかそういうふうにやっていく中で、先生も衛紀生も見かねたんでしょうね。なんかこういうところが募集してるから、受けたらどうだみたいな話をいくつか持ってきてくれて。で、東京共立さんっていうのに行きましたけど。もうなんて言うんだろう、試験会場からもうなんか水が合わなくて、試験を始めって言われた瞬間に、辞めたと思ってパタッとペンを置いて帰りますって帰ってくるような、不良学生だったんですね。で、最後の最後に、「地域創造が募集してるから、お前は受けても無理かもしんないけど受けてみろや」って言われて、なんだそれってカチンときて。受けたらたまたま拾ってもらえたんですね。っていうことで、大学院を出た 24 歳の春から 2 年半ですね、地域創造、赤坂に赴任することになりました。

—演劇をじゃあされていた時代のお話を、聞かせていただいてもいいですか？　フラスコさんとかラダさんとか、ほかになんか関わりのあったところとかあったんですか。

飯川：へもさんがやっていった鳥の庭園っていうカンパニーがあって。そこ、錦町公園で鉄管組んでやったりとか、それの仕込みを手伝ったりとか、あれなんか思い出深いですし。そ

うですね。テント公演やった時は、３劇団、フラスコとあとペリカンさん、大信ペリカンさんの劇団、シア・トリエじゃないや、満塁鳥王一座か、鳥王。そうそうそう。とかと一緒にやったし。フラスコさんで関わらせてもらってた当時は、弘前のスペースデネガとか盛岡劇場とか、そういうところに。あとは、大阪のツアーもあったんで、今はなき扇町ミュージアムスクエアとか、あとはウイングフィールド、周防町のウイングフィールドさんとか、もう本当に小さな小屋だったんですけれど、毎年ツアーっていうのやられていて、そこに一緒に連れてってもらったりっていう関わりが多かったですね。もちろん、仙台で公演がある劇団さんなんかよく観に行ったりはしましたけど。主に関わってたのは、そのへんですかね。そうですね。

—原西さんとか鰯さんとか同じ世代ですよね。

飯川：鰯くんとは非常に仲良くて。東京に引っ越す時も鰯くんと、あとはサイキックって、斎木良太さん、彼、２人で付き合ってもらって、僕、自分で２トンロング運転して、一緒に東京に引っ越ししてもらって。たまたまその日、チェルフィッチュの『三月の５日間』、六本木のシアターでなんか凱旋公演やるっていうんで、たまたまそれ引っ越し終わったあと時間あったから、夜３人で観に行ったんですよね。で、なんかすげえ衝撃を受けて。なんだこれって言って。で、僕のアパートに戻ってきて、３人で寝袋潜って、「眠れないね」とかって言いながら、その感想を話し合うみたいな、そういう時でしたね。

—どこかにじゃあまだ、そういう気持ちもあった。

飯川：僕ずっと、さっきだから、大河原さんから、僕は俳優を辞めたみたいなことをおっしゃって、なるほどそう見えてるんだなと思ってすごい面白かったんですけど。僕の中では、あんまりそこ、考えてないんですよ。だからヌルーっと、ヌルーっと境界をまたいでいくのが僕のスタイルというか。なんでも、僕ね、言い方が変かもしれないですけど、何でもたいがいできるんですよ。でも極められないんですよ。っていう、なんか特殊。なんかそういう特徴があるみたいで。俳優でもあるし。僕だから、例えば狩猟の免許も持ってたりするんですよ。で、藍染めとかも好きだったりするし。で、ラーメンを自作するのも好きだったりするし。いろんなことに興味がある。あとロードバイクに乗って 100km 以上走ったりとかするし。何者なのかっていうのはよく分かってないけど、とにかく好きなことは手を付けないと気が済まないみたいなところがあって。だから表現者であることも、正直降りてない自分がいるんですね。

　で、毎年夏の終わりに、田んぼを、荒浜で丸い田んぼっていうのやってるんですけど、その感謝祭、収穫祭ということで、朗読会を夏の終わりにやるんですね。そこで毎年朗読は、４回やったのかな。だから、毎年朗読っていう形ですけど、俳優的な活動も、表現の活動も

しているし、より、なんていうの、演劇とかダンスとか音楽とかってジャンルをどんどん超えていこうっていうふうに思っていて。だから文章を書くとかでもいいし、あらゆるジャンルの表現というものに非常に関心はあるんです。だから、自分自身もそうだし、周りでそういう表現をしている人たちがどういうことを考えているかって非常に興味があって。

で、その中で、言い方が、これ分かんないけど、演劇っていうジャンルが、閉鎖的だなってちょっと思ってるところがあって。現代美術とかのほうがもっと考え方進んでるんじゃないって思う側面もあったりします。だからそういうとこにどんどん刺激を受けていけばいいのになあって思うけど、でも別にそれは自分が誰かに対して、そうしたほうがいいよって言うべきことでもないと思ってるから。自分がしたければそれはそういうふうにすればいいだろうと思って、活動しているなっていう感じですね。

大河原：表現者として、俳優じゃなくてもいいのかもしれないんですけど、自分の生活の中に、演劇的な行為を営みとして、これからも続けていったり、お休みしたり、もっと強く出すようになったり、たぶんその時のバイオリズムだったりとか、情勢とか状況とかで変わると思うんですけど。なぜ続けると思いますか、自分で。なくならないと思うんです。その火種は、どんなに小さくなっても、種火になっても消えないと思うんですよ。飯川さんについてるもの。

飯川：これ、言葉にすると陳腐なんだけど、生きてる実感を得るためなんですよね。今この瞬間。死ぬのすごい怖いと思ってる人間で。科学館だと思うんだけど、子供の頃に展示を見に行ったんですよ。で、ボタンを押すと、真ん中の黒い穴の周りに、丸い白い玉がコロコロ転がってて。最終的にはもう中心の穴に落っこっちゃうんだけど、これ星の一生ですっていう展示だったんですね。じゃあ地球なくなるじゃんって思ったら、自分が生きてること、意味っていったいどこにあるんだろうと思ったんですね。子供心にすごく不安になって、何も残んないじゃんって。じゃあ生きてる意味ないのかなって思うわけですよね。大好きな友達、恋人、大切な両親、親戚。すごく仲のいい友達とか、幸せな瞬間がいくつもあっても、それは全く無駄なんじゃないかって思って打ちのめされて。その答えをずっと今も探し求めているんだと思うんだけれど。表現をするっていうことは、今このとき、この瞬間を生きていることのチューニングをするみたいなことに近いと思ってて。もう精一杯生きてるぞって言いたいんですよね。

だからでもそれは、いつか星が滅びることに対する、自分なりの答えにはまだたどり着いてないんだけど、まだ言語化できてないけれど、そこに何か近いものが、答えに近づいているんじゃないかという想像、予想があって。チューニングをしていた先にじゃないと、答えがないんじゃないかと思ってるってことですね。